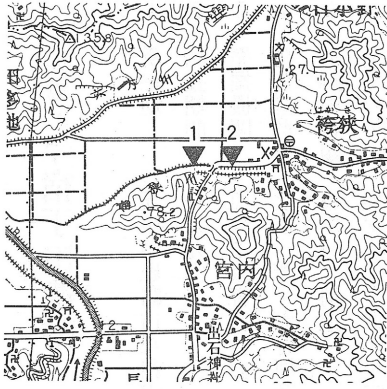


兵庫・袴狭遺跡 はかざ

- 1 所在地 兵庫県出石郡出石町袴狭字内田・国分寺 他
- 2 調査期間 一九九〇年(平2)一〇月～十一月
- 3 発掘機関 兵庫県教育委員会
- 4 調査担当者 渡辺 昇・柏原正民
- 5 遺跡の種類 祭祀遺跡・集落跡
- 6 遺跡の年代 奈良～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(出 石)

袴狭遺跡は、但馬国一宮である出石神社の北側の谷部に位置する遺跡で、但馬最大の河川である円山川河口から約二・一km上流に位置しているにもかかわらず、標高六m前後と非常に低い平地に立地している。さらに地盤が花崗岩で常に河川の氾濫にあっている地域である。

本遺跡は、一九八九年に
出石町教育委員会によって
調査が行なわれ、木簡など

興味ある遺物が多数出土し、注目されてきた。約五〇〇m離れた対岸には砂入遺跡が立地している。また、砂入遺跡の西方の田多地小谷遺跡や袴狭遺跡西方の嶋遺跡なども一連の遺跡と考えられ、総称して袴狭遺跡群としてとらえられるものである。

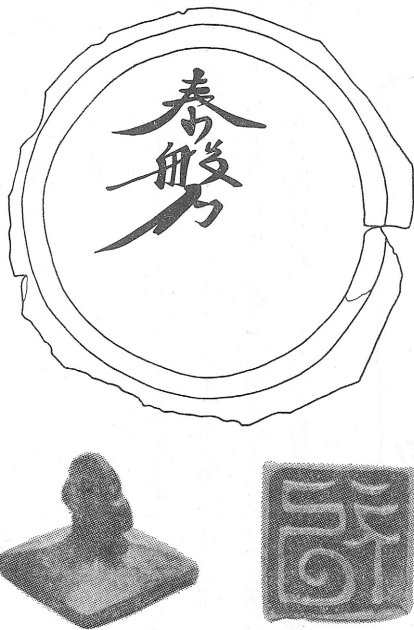
今回の調査は、小野川放水路建設に関連した袴狭川の河川改修に伴うもので、袴狭川沿いの一部(国分寺地区)を全面調査し、その上流部については確認調査を実施した。そのため、二地区に分けて記述する。

一 国分寺地区

現河道に沿って、狭いところで幅二m、広いところで幅九mの部分の調査を行なった。その結果、道状遺構(SF〇一・〇二)と旧河道(SD〇一)、溝状遺構(SD〇二)を検出した。

时期的には大きく上下二層に分けられる。SD〇二はSF〇二に伴う溝で、杭列・しがらみなどを構築している。砂入遺跡の溝同様に下層で古い遺物が出土している。その他の遺構は新しい時期のものである。道状遺構は砂入遺跡で検出したような粗朶敷きの大規模なものではなく、SF〇一がわずかに叩き締めた程度である。

木簡(1)はSD〇二の下層より、(2)は下層の溝の、氾濫による堆積土より出土した(他に呪符の断片と算しきものが一点ある)。(3)の二片は同一個体と思われるが、直接は接続しない。溝の上層の堆積土より出土した。



S D O 一は旧河道で、その肩部に祭祀遺物を流しているようである。

二 内田地区

九本のトレンチを設定して確認調査を実施した。すべてのトレンチで祭祀遺物が出土しており、旧河道なども検出している。(1)も旧河道もしくはそれに付随する淀みから出土した。(2)の木簡の出土した地点では、明確な遺構は検出されていないが、岩盤である地山を削り出し、谷部を埋めて整地している。一カ所ではあるが多面体の大型の柱を確認していることと、大規模な整地を行なっていることから大型の倉庫群が存在したのではないかと思われる。(2)はその整

地面の南側の低い部分で出土している。整地面から墨書土器・銅印・石帯が出土している。墨書土器は須恵器杯で底面に「秦磐」と個人名が書かれている。銅印はほぼ一寸四方で「福」の字が彫られている。石帯(一点)は、全長七・四cmを測る大型の石製の鉞尾である。他に須恵器・土師器も出土しており、袴狭遺跡群の中では土器の量が特に多い。

遺構面の下層には旧河道が存在しており、馬形・斎串などの祭祀遺物が出土している。この地区も祭祀の場から生活の場へ移行したことが明らかである。

8 木簡の釈文・内容

一 国分寺地区

(1) 「(鬼の絵) 里中家曰人

其□地屋入□ 157×(30)×6 081

(2) 「(咄吠カ) 足(符籙)

・「<□□西 (58)×(21)×3 039

(3) 「石□□□□□□不可苅所□□副カ

「如件カ」 : 「分カ」

(62+102)×(45)×5 032

二 内田地区

(1) 「鬼」

(103) × 62 × 65 081

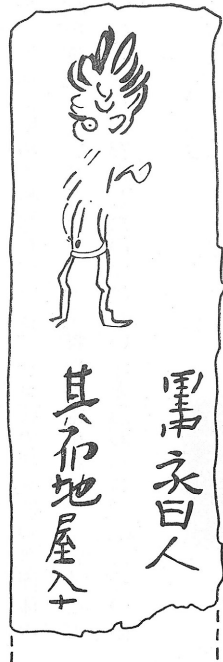
(2)

□ 福 □

入里 □

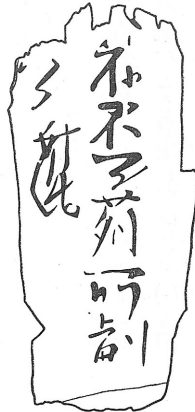
(87) × 88 × 5 081

出土した木簡は六点であるが、整理調査段階であるので、増加する可能性も十分に考えられる。同様に内田地区では墨書土器も増加することが予測される。今後全面調査が実施されると新たな発見が得られるものと思われる。これまでも袴狭遺跡群（袴狭遺跡・砂入



(1)

国分寺地区



(3)

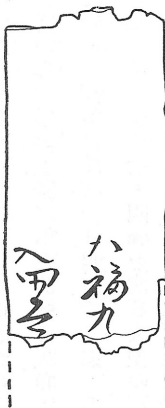
遺跡・嶋遺跡)では木簡が出土しており、旧河道が主として検出されていたが、今回、建物の存在が推定されるに至り、遺跡の性格を考える上にも変化が生じてくるものと思われる。
木簡の釈読については、奈良国立文化財研究所寺崎保広氏のご教示を得た。

(渡辺 昇)



(1)

内田地区



(2)